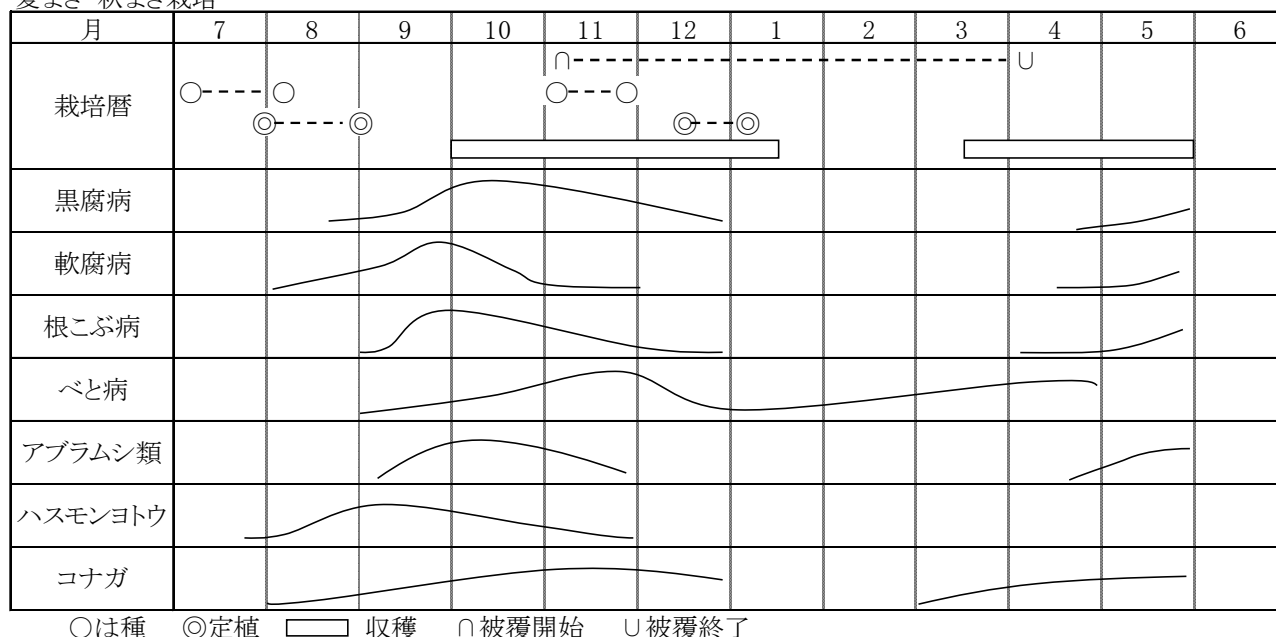


(13) カリフラワー

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害

夏まき・秋まき栽培



2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
黒腐病 (細菌)	①種子消毒を行う（野菜種子の消毒の項参照）。 ②アブラナ科作物の連作を避け、3年以上の輪作とする。 ③排水を良好にする。 ④多発したほ場では、残さをほ場外に搬出し、土中深く埋める。 ⑤常発ほ場では発病の少ない品種を栽培する。 【参考事項】 傷口などから病原細菌が侵入するため、強風雨後や害虫の食害痕の多いときに発生が多くなる。 土中における病原細菌の生存期間は2年程度である。
軟腐病 (細菌)	①イネ科、マメ科作物と4～5年の輪作をする。 ②定植前には除草し、裸地しておく。 ③早播きをしない。定植時の地温が20℃以上になるときはポット育苗するなど、移植時の傷を少なくする。 ④育苗期が台風の季節に当たる場合には、風当たりの強い場所は避け、強風雨時は寒冷紗をかけるなど防風対策をする。 ⑤排水を良好にする。 ⑥スプリンクラーによる灌水は朝のうちにやり、水压を必要以上に高くしない。 ⑦発病株を早期に除去して土中深く埋める。 ⑧健全株から先に収穫するようにするとともに株の濡れているときの収穫は避ける。 ⑨収穫後の残さはできるだけ早めに抜き取り、ほ場外に搬出するか土中深く埋める。 【参考事項】 前作にイネ科、マメ科作物を植えておくと、裸地の場合より菌密度は下がる。暖秋、多雨の年に多発する。 病原細菌は土壌中に残り、雑草を含む植物の根圏で生息する。降雨直後の作業は発病を助長する。 秋冬穫りの栽培では早播きすると発生が多い。農薬は株の地際部を重点的に散布する。 台風などの後には速やかに農薬を散布する。収穫時に切り口から感染し、出荷後に発病することがある。 害虫の食痕からも侵入するので、害虫を防除することが大切である。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
根こぶ病 (<i>Plasmodiophora</i>)	①アブラナ科作物の連作を避ける。輪作する場合には、3年以上アブラナ科以外の作物を栽培する。 ②石灰や転炉スラグ等で土壌酸度をpH6.5以上に矯正する。 ③排水を良好にする。 ④土壌の通気を良好にする。 ⑤常発地では夏播き栽培を避ける。 ⑥農機具はよく洗うか消毒する。 ⑦発生した畑は各種野菜の苗床として用いない。また、発病は場又はその付近の水田土壌を各種野菜の苗床用土に用いない。 ⑧発病株は早めに抜き取って、ほ場外に搬出し適切に処分する。 ⑨前作におとり作物（抵抗性ダイコン等）を栽培し病原菌密度を下げる。
	【参考事項】 pH6.0以下の酸性土壌で発生が多い。発病根部が土壌に残ると病原菌が広がる。 低湿地で発病が多く、かんがい水によって病原菌が広く分散する。気温18～25℃の時期に発生しやすい。
べと病 (<i>Peronospora</i>)	①排水を良好にする。 ②密植を避ける。 ③窒素肥料を過用しない。 ④肥料切れさせない。
	【参考事項】 病原菌は各種アブラナ科作物のべと病の病原菌と同種である。
アブラムシ類	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。
	【参考事項】 モモアカアブラムシは主に10～6月、ダイコンアブラムシは主に4～7月、ニセダイコンアブラムシは主に9～3月に発生する。葉液は葉裏にも十分かかるようにする。
コナガ	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。
	【参考事項】 発生回数が多く、春から初冬まで加害する。
ハスモンヨトウ	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。
	【参考事項】 通常8月中旬頃から発生する。サトイモ、ダイズなどで発生を認めたら、カリフラワーでも注意する。